[別紙2]

審査の結果の要旨

氏名　　酒井　佳永

本研究は、精神分裂病患者の抑うつと関連する要因について検討したものである。本研究は、精神分裂病患者において、病識の高さによって疾病に対する態度や対処方法が異なるという先行研究があることに着目し、病識の高い患者と低い患者において、異なる要因が抑うつの低さと関連する対処方法が異なることを検討した点である。精神分裂病患者の抑うつに関する先行研究はあるが、病識の高さによる抑うつと関連する要因の違いを検討した研究はこれまでにない。また病識が高い患者は抑うつ的になりやすいことは先行研究で示されているが、病識が高い患者、低い患者のなかで、どのような患者が特に抑うつ的になりやすく、どのような患者が抑うつ的になりにくいかについて検討した研究も、未だ報告されていない。

本研究では、NTT 東日本関東病院に外来通院しており、Structured Clinical Interview for DSM-Ⅳによって精神分裂病の診断が確定され、かつ紙面による告知同意が得られた患者を対象とした。調査内容は，患者の性別、年齢、教育年数などの人口統計学的変数、発症してからの年数、入院回数、症状の重症度、実行機能などの臨床的属性に加え、患者の病識、抑うつの程度、疾病の主観体験に対する対処方法とその主観的な効果を測定した。なお本研究では，既存の尺度については信頼性と妥当性の確立されたものを用い、また主観体験への対処方法の評価面接については、本研究における評価者間信頼性を算出し、高い評価者間信頼性を確認している。主要な結果は下記の通りである。

1．　本研究の対象者 69 名のうち、精神障害の存在を自覚している患者は（高自覚群）36 人であり、精神障害の存在を自覚していない患者（低自覚群）は 33 人であった。

2．　高自覚群は、低自覚群よりも有意に抑うつ的であった。

3．　高自覚群は低自覚群よりも多くの主観体験を報告しており、また高自覚群は主観体験を有意に強くストレスフルで、コントロールできないものと感じていた。

4．　高自覚群は低自覚群よりも，非問題中心的－行動的対処（寝る，おしゃべりする，たばこを吸うなど、問題をコントロールするのではなく問題から距離をおく対処であり、かつ外的に観察できる行動による対処）と，情緒的な対処（悲しくなってしまう，興奮してしまうなど、無力な情緒表出による対処）を多くの割合で用いていた。一方で，低自覚群においては，高自覚群よりも非問題中心的－認知的対処（気にしないよ

うにする，そういうものだとおもってあきらめるなど、問題から距離を置く対処であり、かつ外的に観察できない患者の内的過程による対処）が用いられる割合が高かった。しかし高自覚群と低自覚群では自分の行っている対処を効果的であると評価している患者の割合には、有意な差が見られなかった。

5．　抑うつの程度と関連する要因については陽性症状の重さ、主観体験の数、主観体験によるストレスの高さとの間に有意な正の相関があった。また非問題中心的－行動的対処と情緒的対処を多く行っているほど患者は抑うつ的であり、逆に非問題中心的－認知的対処を行っているほど、患者は抑うつ的ではないという関連が見られた。また自分の対処を効果的と考える患者は、より抑うつ的ではないという傾向がみられた。

6．　障害自覚の高低と対処の効果を独立変数、抑うつの重症度を従属変数、主観体験の数と陽性症状の重症度を共変量とした２元配置の共分散分析を行った。分析の過程で陽性症状の重さは、障害の自覚の高さによって、抑うつに異なる影響をもつことが示された。そのため、陽性症状の重症度を共変量から除いて分析を行ったところ、障害の自覚と対処の主効果は抑うつに対する有意な影響力を失った。一方で、障害の自覚と対処の効果の交互作用は有意であり、高自覚群においては対処の効果が低い患者は高い患者よりも抑うつ的であったが、低自覚群においては対処の効果の高低による抑うつの重症度の差は見られなかった。また４群間の比較では、高自覚かつ対処の効果が低い群が他の３群よりも有意に抑うつ的であるという結果が得られた。

7．　最後に、高自覚群、低自覚群それぞれにおける、抑うつの重症度と関連する要因を、Spearman の順位相関係数によって検討した。高自覚群では陽性症状が重く、主観体験の数が多く、主観体験によるストレスが高いほど、抑うつ的であるという結果が得られた。一方、低自覚群では陰性症状が重く、非問題中心的－認知的対処をより多くの割合で用いているほど抑うつ的ではなく、逆に主観体験によるストレスの高く、非問題中心的－行動的対処と情緒的対処指標を多く用いているほど抑うつ的であるという結果が得られた。

以上，本論文は精神分裂病患者の抑うつに関連する要因が、病識の高さによって異なることを示した点で独創的である。また本論文は、病識が高い患者であっても、疾病に対処できていると感じているときには、抑うつ的ではない事を示した。これは精神分裂病患者の心理教育などに対する示唆を与えるものであり、臨床的な有用性もあると考えられる。よって、学位の授与に値するものと考えられる。